

単純かつ実用的な静的サイズ検査つき 線形代数演算ライブラリの試作と検証

PPL 2014

平成 26 年 3 月 5 日 (水)

阿部晃典¹ 住井英二郎²

¹ 東北大学 工学部 情報知能システム総合学科
abe@kb.ecei.tohoku.ac.jp

² 東北大学 大学院 情報科学研究科
sumii@ecei.tohoku.ac.jp

行列演算のサイズ検査

多くの数値計算言語や線形代数演算ライブラリは
行列演算のサイズの整合性を静的に 保証しない
(MatLab, BLAS, LAPACK, etc.)

- サイズの合わない行列演算は実行時エラーや不具合の原因
(例外やメモリ破壊など)

行列演算のサイズ検査

多くの数値計算言語や線形代数演算ライブラリは
行列演算のサイズの整合性を静的に 保証しない
(MatLab, BLAS, LAPACK, etc.)

- サイズの合わない行列演算は実行時エラーや不具合の原因
(例外やメモリ破壊など)

行列演算の静的サイズ検査が実現できれば,

- バグの早期発見
- 実行時サイズ検査の除去

が期待できる

既存研究

自然数上の依存型を用いた既存研究：

- Dependent ML [Xi and Pfenning, 1999], ATS [Xi]
- sized type [Chin and Khoo, 2001]

型システムやアプリケーションプログラムに
自明でない変更が必要！

既存研究

自然数上の依存型を用いた既存研究：

- Dependent ML [Xi and Pfenning, 1999], ATS [Xi]
- sized type [Chin and Khoo, 2001]

型システムやアプリケーションプログラムに
自明でない変更が必要！

【疑問】

こんな静的サイズ検査を実現できないか？

- 既存のメジャーなプログラミング言語で実現できる
- アプリケーションプログラムに簡単に導入できる

本研究の貢献

生成的 (generative) な幽霊型 (phantom type) により
静的サイズ検査を行う線形代数演算ライブラリ

【特徴】

- ほぼ標準的な ML の型システムとモジュールシステムで実現可能
 - 関数型プログラミング言語 OCaml でライブラリを試作
- ほとんどの高水準な行列演算（行列積など）の静的サイズ検査が可能
 - （添字アクセスなど）一部の低水準な演算などは実行時検査を伴う
- 既存のアプリケーションプログラムへの変更がほとんど不要

アウトライン

- ① 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- ② 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- ③ 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- ④ 実装と検証

アウトライン

- 1 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- 2 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- 3 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- 4 実装と検証

型レベル自然数による静的なサイズ情報の表現

```
module M : sig
  type z      (* ゼロ --- 幽霊型 (phantom type) *)
  type 'n s   (* 後者 (successor) --- 幽霊型 (phantom type) *)
end
```

型レベル自然数による静的なサイズ情報の表現

```
module M : sig
  type z      (* ゼロ --- 幽霊型 (phantom type) *)
  type 'n s   (* 後者 (successor) --- 幽霊型 (phantom type) *)
  type 'n vec (* 'n 次元ベクトルの型 *)

  type ('m, 'n) mat (* 'm 行 'n 列の行列の型 *)

end
```

型レベル自然数による静的なサイズ情報の表現

```
module M : sig
  type z      (* ゼロ --- 幽霊型 (phantom type) *)
  type 'n s   (* 後者 (successor) --- 幽霊型 (phantom type) *)
  type 'n vec (* 'n 次元ベクトルの型 *)
  val empty  : z vec
  val cons   : float -> 'n vec -> 'n s vec
  val add    : 'n vec -> 'n vec -> 'n vec (* ベクトルの加算 *)
  ...

  type ('m, 'n) mat (* 'm 行 'n 列の行列の型 *)
  val add_mat : ('m, 'n) mat -> ('m, 'n) mat -> ('m, 'n) mat
  val mul_mat : ('m, 'n) mat -> ('n, 'k) mat -> ('m, 'k) mat
  ...
end
```

型レベル自然数による静的サイズ検査

```
# open M

# let a = cons 1.0 (cons 2.0 empty)
  val a : z s s vec

# let b = cons 3.0 a
  val b : z s s s vec

# let c = cons 4.0 (cons 5.0 (cons 6.0 empty))
  val c : z s s s vec

# add b c (* 型が付く (b と c は同じサイズ) *)
- : z s s s vec

# add a b (* 型エラー (a と b は異なるサイズ) *)
```

アウトライン

- ① 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- ② 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- ③ 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- ④ 実装と検証

生成的な幽霊型が必要になる場合

```
val loadvec : string -> ? vec (* ファイルからベクトルを読み込む *)
```

生成的な幽霊型が必要になる場合

```
val loadvec : string -> ? vec (* ファイルからベクトルを読み込む *)
```

- 異なるファイルから読み込んだベクトルの加算

```
let (x : ?1 vec) = loadvec "file1" in  
let (y : ?2 vec) = loadvec "file2" in  
add x y (* 型エラーを起こすべき (?1 ≠ ?2) *)
```

生成的な幽霊型が必要になる場合

```
val loadvec : string -> ? vec (* ファイルからベクトルを読み込む *)
```

- 異なるファイルから読み込んだベクトルの加算

```
let (x : ?1 vec) = loadvec "file1" in  
let (y : ?2 vec) = loadvec "file2" in  
add x y (* 型エラーを起こすべき (?1 ≠ ?2) *)
```

- 同じファイルから読み込んだベクトルの加算

```
let (x : ?1 vec) = loadvec "file" in  
let (y : ?2 vec) = loadvec "file" in  
add x y (* 型エラーを起こすべき (?1 ≠ ?2) *)
```

読み込み中にファイルが書き換えられるかもしれない

生成的な幽霊型が必要になる場合

```
val loadvec : string -> ? vec (* ファイルからベクトルを読み込む *)
```

- 異なるファイルから読み込んだベクトルの加算

```
let (x : ?1 vec) = loadvec "file1" in  
let (y : ?2 vec) = loadvec "file2" in  
add x y (* 型エラーを起こすべき (?1 ≠ ?2) *)
```

- 同じファイルから読み込んだベクトルの加算

```
let (x : ?1 vec) = loadvec "file" in  
let (y : ?2 vec) = loadvec "file" in  
add x y (* 型エラーを起こすべき (?1 ≠ ?2) *)
```

読み込み中にファイルが書き換えられるかもしれない

したがって、loadvec の戻り値の型は（引数の値に関係なく）
「実行する度に異なる型」になるべき

生成的な幽霊型

```
val loadvec : string -> ? vec
```

? は生成的な幽霊型 :

- 関数は呼ばれる度にフレッシュな型の値を返す
 - 生成的な型 — 値が作られる度に, 新たに与えられる型
- $\exists n$. n `vec` のような存在限量化されたサイズつき型を表現
 - コンパイル時に実行時のサイズは不明
 - 他のいずれのベクトルとも異なるサイズと仮定

生成的な幽霊型の実現

OCaml では、「戻り値の型が生成的な関数」は書けない

- これ以降は、そのような関数を書ける仮想的な言語で説明
- 本研究では **ファンクター** を用いて実現

```
module F (S : sig end) : sig
  type t                (* 生成的な幽霊型に相当 *)
  val value : t vec    (* ? vec に相当 *)
end = struct
  type t
  let value = ...
end

module M1 = F(struct end)
module M2 = F(struct end)
add M1.value M2.value (* 型エラー (M1.t ≠ M2.t) *)
```

アウトライン

- ① 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- ② 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- ③ 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- ④ 実装と検証

生成的な幽霊型 のみ による静的サイズ検査

型レベル自然数は 演算が大変 → 生成的な幽霊型 のみ を使う

- `val cons` : `float -> 'n vec -> 'n s vec`
- `val tl` : `'n s vec -> 'n vec`

生成的な幽霊型 のみ による静的サイズ検査

型レベル自然数は 演算が大変 → 生成的な幽霊型 のみ を使う

- `val cons : float -> 'n vec -> 'n-s vec`
?
- `val tl_dyn : 'n-s vec -> 'n vec`
'n ?

※ `_dyn` は実行時検査を伴う関数

サイズの等しさしか検査しない！ → 型付けが大幅に単純化

生成的な幽霊型 のみ による静的サイズ検査

型レベル自然数は 演算が大変 → 生成的な幽霊型 のみ を使う

- `val cons : float -> 'n vec -> 'n-s vec`
?
- `val tl_dyn : 'n-s vec -> 'n vec`
? ?

※ `_dyn` は実行時検査を伴う関数

サイズの等しさしか検査しない！ → 型付けが大幅に単純化

【疑問】 具体的サイズ情報が失われても困らない？

→ ライブラリを試作して、実際のアプリケーションプログラムで検証

生成的な幽霊型 のみ による静的サイズ検査

型レベル自然数は 演算が大変 → 生成的な幽霊型 のみ を使う

- `val cons` : `float -> 'n vec -> 'n-s vec`
?
- `val tl_dyn` : `'n-s vec -> 'n vec`
'n ?

※ `_dyn` は実行時検査を伴う関数

サイズの等しさしか検査しない！ → 型付けが大幅に単純化

【疑問】 具体的サイズ情報が失われても困らない？

→ ライブラリを試作して、実際のアプリケーションプログラムで検証

- 結論： 実用上は問題ない
- 理由： `cons` や `tl_dyn` のような関数の使用頻度は低い

アウトライン

- ① 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- ② 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- ③ 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- ④ 実装と検証
 - BLAS と LAPACK への静的サイズ検査の導入
 - 検証方法
 - 検証結果

アウトライン

- ① 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- ② 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- ③ 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- ④ 実装と検証
 - BLAS と LAPACK への静的サイズ検査の導入
 - 検証方法
 - 検証結果

BLAS と LAPACK

BLAS, LAPACK :

- Fortran の線形代数演算ライブラリ (様々な言語に移植されている)
- 高速 & 汎用的
- 数値計算で多用

本研究では BLAS と LAPACK に静的サイズ検査を導入し、
線形代数演算ライブラリを OCaml で試作した

- 多くの高水準な行列演算に本研究の方法で型付けできた
 - この後、型付けの例を紹介
- 一部、大小比較などを必要とする仕様が存在
 - 添字アクセスなど、一部の低水準な操作
 - オフセットとインクリメント幅
 - LAPACK 関数の作業領域サイズ
 - 大小関係に基づく仕様を含む関数 (orgqr, ormqr, syevr)

型付けの例 (1) — ベクトルの内積・加算

ベクトルの内積

※ 説明に無関係な引数は省略

```
val dot : x:vec -> vec -> float
```



```
val dot : x:'n vec -> 'n vec -> float
```

型付けの例(1) — ベクトルの内積・加算

ベクトルの内積

※ 説明に無関係な引数は省略

```
val dot : x:vec -> vec -> float
```



```
val dot : x:'n vec -> 'n vec -> float
```

ベクトルのスカラー倍と加算 ($y \leftarrow \alpha x + y$)

```
val axpy : ?alpha:float -> x:vec (* x *) -> vec (* y *) ->unit
```



```
val axpy : ?alpha:float -> x:'n vec -> 'n vec -> unit
```

型付けの例 (2) — 転置フラグ

一般行列同士の積

```
val gemm : ?alpha:num_type -> ?beta:num_type -> ?c:mat (* C *)  
  -> ?transa:[ 'N | 'T | 'C ] -> mat (* A *)  
  -> ?transb:[ 'N | 'T | 'C ] -> mat (* B *) -> mat (* C *)
```

A と B に非転置 ('N), 転置 ('T), 共役転置 ('C) を指定できる :

- 例) $\text{transa}='N$, $\text{transb}='T$ のとき, $C \leftarrow \alpha AB^T + \beta C$

型付けの例 (2) — 転置フラグ

一般行列同士の積

```
val gemm : ?alpha:num_type -> ?beta:num_type -> ?c:mat (* C *)  
  -> ?transa:[ 'N | 'T | 'C ] -> mat (* A *)  
  -> ?transb:[ 'N | 'T | 'C ] -> mat (* B *) -> mat (* C *)
```

A と B に非転置 ('N), 転置 ('T), 共役転置 ('C) を指定できる:

- 例) $\text{transa}='N$, $\text{transb}='T$ のとき, $C \leftarrow \alpha AB^T + \beta C$

```
type 'a trans (* = [ 'N | 'T | 'C ] *)  
val normal : (('m,'n) mat -> ('m,'n) mat) trans (* = 'N *)  
val trans : (('m,'n) mat -> ('n,'m) mat) trans (* = 'T *)  
val conjtr : (('m,'n) mat -> ('n,'m) mat) trans (* = 'C *)  
  
val gemm : ... -> ?c:('m,'k) mat (* C *) ->  
  transa:(('x,'y) mat->('m,'n) mat) trans -> ('x,'y) mat (* A *) ->  
  transb:(('z,'w) mat->('n,'k) mat) trans -> ('z,'w) mat (* B *) ->  
  ('m,'k) mat (* C *)
```

型付けの例 (3) — 乗算方向フラグ

$k \times k$ 対称行列 A と $m \times n$ 一般行列 B の積

```
val symm : ?beta:num_type -> ?alpha:num_type ->
  ?side:[ 'L | 'R ] -> ?c:mat (* C *) -> mat (* A *) ->
  mat (* B *) -> mat (* C *)
```

- side='L のとき, $C \leftarrow \alpha AB + \beta C$ (ただし, A は $m \times m$ 行列)
- side='R のとき, $C \leftarrow \alpha BA + \beta C$ (ただし, A は $n \times n$ 行列)

型付けの例 (3) — 乗算方向フラグ

$k \times k$ 対称行列 A と $m \times n$ 一般行列 B の積

```
val symm : ?beta:num_type -> ?alpha:num_type ->
  ?side:[ 'L | 'R ] -> ?c:mat (* C *) -> mat (* A *) ->
  mat (* B *) -> mat (* C *)
```

- side='L のとき, $C \leftarrow \alpha AB + \beta C$ (ただし, A は $m \times m$ 行列)
- side='R のとき, $C \leftarrow \alpha BA + \beta C$ (ただし, A は $n \times n$ 行列)

```
type ('k, 'm, 'n) side (* = [ 'N | 'T | 'C ] *)
val left  : ('m, 'm, 'n) trans (* = 'L *)
val right : ('n, 'm, 'n) trans (* = 'R *)

val symm : ... -> side:('k, 'm, 'n) side ->
  ?c:('m, 'n) mat (* C *) -> ('k, 'k) mat (* A *) ->
  ('m, 'n) mat (* B *) -> ('m, 'n) mat (* C *)
```

アウトライン

- 1 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- 2 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- 3 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- 4 実装と検証
 - BLAS と LAPACK への静的サイズ検査の導入
 - 検証方法
 - 検証結果

- Lacaml — BLAS と LAPACK の OCaml バインディング
(静的サイズ検査なし)
- Slap — 我々が試作した線形代数演算ライブラリ
(静的サイズ検査あり, Lacaml 互換インタフェース)

以下のアルゴリズムを Lacaml と Slap で実装してコードを比較
(<https://github.com/akabe/slap-lacaml>)

- LU 分解
- QR 分解
- 単純パーセプトロン
- K-means クラスタリング
- 主成分分析

アウトライン

- 1 背景：型レベル自然数による静的サイズ検査
- 2 本研究のアイデア 1：生成的な幽霊型による静的サイズ検査
- 3 本研究のアイデア 2：生成的な幽霊型「のみ」による静的サイズ検査
- 4 実装と検証
 - BLAS と LAPACK への静的サイズ検査の導入
 - 検証方法
 - 検証結果

検証結果

今回、検証に用いたアルゴリズムでは、
比較的小さい書き換えで済んだ：

- 添字アクセスの記法の変更：`x.{i,j}` → `get_dyn, set_dyn`
- 転置フラグなどの書き換えが必要
- `int` 型と `'n size` 型を区別する必要がある

【結果】

- 各行列演算のサイズの整合性を等しさのみで検査する方法で、アプリケーションプログラム全体を検査することができた
 - ※ 一部の低水準な操作や大小関係を除く
- プログラム記述の柔軟性の低下は問題にならなかった
- OCaml の型推論の恩恵を受けられる
 - 生成的幽霊型を実現するモジュールに関する型注釈をユーザが書く必要はなかった

まとめ

- 生成的な幽霊型によるサイズ表現
 - $\exists n. n \text{ vec}$ のような存在限量化されたサイズつき型を表現
 - サイズの等しさのみを検査
- BLAS と LAPACK への型付け
 - 多くの高水準な行列演算を型付けできた
 - 一部、大小比較などが必要な仕様が存在
- アプリケーションプログラムの移植によるライブラリの有効性の検証
 - プログラムへの変更がほぼ不要

【課題】

- ライブラリの内部実装の静的サイズ検査
- 生成的な幽霊型を含む型システムの定式化
- 大小比較や自然数上の演算を含むサイズ検査の実現

など

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

型レベル自然数による静的なサイズ情報の表現

```
module Vec : sig
  type z      (* ゼロ *)
  type 'n s   (* 後者 (successor) *)
  type 'n vec (* ベクトル型 *)
  val empty  : z vec
  val cons   : float -> 'n vec -> 'n s vec
  val hd     : 'n s vec -> float
  val tl     : 'n s vec -> 'n vec
  val dim    : 'n vec -> int (* ベクトルの次元を返す *)
  val add    : 'n vec -> 'n vec -> 'n vec (* ベクトルの加算 *)
end
```

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

リストとの変換

of_list には

```
val of_list : float list -> 'n vec
```

という型を与えたい。

戻り値の 'n には, リストのサイズに対応する型を代入したい

リストとの変換

of_list には

```
val of_list : float list -> 'n vec
```

という型を与えたい。

戻り値の 'n には、リストのサイズに対応する型を代入したい

サイズを表す型を受け取る引数を加えてみる：

```
val of_list_dyn : float list -> 'n vec -> 'n vec
let of_list_dyn l v =
  if List.length l = dim v then l else invalid_arg "..."
```

※ `***_dyn` は実行時検査を伴う関数

リストとの変換

of_list には

```
val of_list : float list -> 'n vec
```

という型を与えたい。

戻り値の 'n には、リストのサイズに対応する型を代入したい

サイズを表す型を受け取る引数を加えてみる：

```
val of_list_dyn : float list -> 'n vec -> 'n vec
let of_list_dyn l v =
  if List.length l = dim v then l else invalid_arg "..."
```

※ `***_dyn` は実行時検査を伴う関数

第2引数で必要とされているのは **サイズ情報** (ベクトルではない)

単一型 (singleton type)

サイズ自体を表す値とその型 'n size を導入する :

```
module Vec : sig
  type 'n size
  val size_to_int : 'n size -> int
  val dim          : 'n vec -> 'n size
  val of_list_dyn : float list -> 'n size -> 'n vec
  ...
end = struct
  type 'n size = int
  let size_to_int n = n
  let dim          = List.length
  let of_list_dyn l n = if List.length l = n then l else ...
  ...
end
```

'n size は単一型 — α size 型の式の評価結果 = 型 α に対応する自然数

第一級サイズ値が有用である別な例

$m \times n$ 行列や $k \times l$ 行列から $m \times k$ 行列や $n \times k$ 行列を作ることを考える。

- 'n size 型を導入しない場合：

```
val of_list_dyn1 : float list list -> ('m, 'n) mat ->
    ('k, 'l) mat -> ('m, 'k) mat
val of_list_dyn2 : float list list -> ('m, 'n) mat ->
    ('k, 'l) mat -> ('n, 'k) mat
...
```

パラメータの全ての組合せが必要

- 'n size 型を導入する場合：

```
val dim1      : ('m, 'n) mat -> 'm size
val dim2      : ('m, 'n) mat -> 'n size
val of_list_dyn : float list list -> 'm size -> 'n size ->
    ('m, 'n) mat
```

of_list_dyn は1つで十分

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

自然数上の演算を表す型演算子

- 生成的な幽霊型による `append` の型付け :

```
val append : 'm vec -> 'n vec -> ? vec
```

- 自然数上の演算の結果をフレッシュな自然数と見なしている

自然数上の演算を表す型演算子

- 生成的な幽霊型による `append` の型付け :

```
val append : 'm vec -> 'n vec -> ? vec
```

- 自然数上の演算の結果をフレッシュな自然数と見なしている
- もっと簡単に表現できる :

```
val append : 'm vec -> 'n vec -> ('m, 'n) add vec
```

- 加算は決定的 (deterministic) な演算
- 加算を単なる自由代数 (free algebra) と考える

これなら、OCaml の型システムで直接的に実現できる !

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

自然数の情報が失われる

1. 大小関係を表現できない
2. 自然数上の計算を表現できない

自然数の情報が失われる

1. 大小関係を表現できない

【型レベル自然数】

```
val hd : 'n s vec -> float
val tl : 'n s vec -> 'n vec
```

2. 自然数上の計算を表現できない

自然数の情報が失われる

1. 大小関係を表現できない

【型レベル自然数】

```
val hd : 'n s vec -> float  
val tl : 'n s vec -> 'n vec
```

【生成的な幽霊型】

```
val hd_dyn : 'n vec -> float  
val tl_dyn : 'n vec -> ? vec
```

2. 自然数上の計算を表現できない

自然数の情報が失われる

1. 大小関係を表現できない

【型レベル自然数】

```
val hd : 'n s vec -> float  
val tl : 'n s vec -> 'n vec
```

【生成的な幽霊型】

```
val hd_dyn : 'n vec -> float  
val tl_dyn : 'n vec -> ? vec
```

2. 自然数上の計算を表現できない

```
val cons : float -> 'n vec -> ? vec  
  
let (x : ?1 vec) = ...  
let (y : ?2 vec) = cons 42.0 x  
let (z : ?3 vec) = tl_dyn x
```

- ベクトル x と z のサイズは等しい
- しかし、型は異なる ($?^1 \neq ?^3$)

生成的な幽霊型のみに基づく静的サイズ検査

生成的な幽霊型 のみ で型付けを大幅に単純化

- 自然数の情報が失われる
- サイズの等しさしか検査しない

- 「型が等しければサイズが等しい」という健全性は失われないものと思われる
- アプリケーションプログラムの型付けには支障がない

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

プログラムの記述の柔軟性の低下

- hd_dyn, tl_dyn は型エラーになりやすい :

```
let fold_left f e v =  
  if int_of_size (dim v) = 0 then e else  
  fold_left f (f e (hd_dyn v)) (tl_dyn v)
```

【理由】 fold_left に型が付いたと仮定する.

ある型 t について $v : t \text{ vec}$ とすると,

- フレッシュな型 u について $tl_dyn\ v : u \text{ vec}$ なので, $t = u$
- しかし, フレッシュの定義より, $t \neq u$

プログラムの記述の柔軟性の低下

- hd_dyn, tl_dyn は型エラーになりやすい :

```
let fold_left f e v =  
  if int_of_size (dim v) = 0 then e else  
  fold_left f (f e (hd_dyn v)) (tl_dyn v)
```

【理由】 fold_left に型が付いたと仮定する.

ある型 t について $v : t \text{ vec}$ とすると,

- フレッシュな型 u について $tl_dyn\ v : u \text{ vec}$ なので, $t = u$
 - しかし, フレッシュの定義より, $t \neq u$
- get_dyn など添字アクセスすると型エラーにならない :

```
let fold_left f e v =  
  let rec loop e i =  
    if i = int_of_size (dim v) then e else  
    loop (f e (get_dyn v i)) (i + 1) in  
  loop e 0
```

プログラムの記述の柔軟性の低下は問題にならない？

【予想】

hd_dyn や tl_dyn はあまり使わない？

【理由】

- tl_dyn 等の構造の分解を伴う操作は **ライブラリ側で提供**
 - map や fold_left などのイテレータ関数
 - ブロック行列などを必要とする処理 など
- ユーザ側での tl_dyn 等の使用頻度が減る
- 要素へのアクセスについては、**添字**を使うことが多い

実際のアプリケーションプログラムで検証した結果、
「プログラムの記述の柔軟性の低下」は問題にならなかった。

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

適用的ファンクターと生成的ファンクター

ファンクター — モジュールからモジュールへの写像

例) 型 `t` 上の順序関係を受け取り,
順序集合のモジュールを返すファンクター

```
module MakeOrdSet
  (X : sig type t val cmp : t -> t -> int end) : sig
    type t (* 順序集合の型 *)
    type elt = X.t

    val empty : t
    val insert : elt -> t -> t
    ...
  end = struct ... end
```

適用的ファンクターと生成的ファンクター

```
module MakeOrdSet (X : sig type t val cmp : t -> t -> int end)
  : sig type t ... end

module OrdInt = struct type t = int val cmp = ... end
module M1 = MakeOrdSet(OrdInt)
module M2 = MakeOrdSet(OrdInt)
```

【疑問】 M1 と M2 は同じモジュールと見なすべき？ (M1.t = M2.t ?)

適用的ファンクターと生成的ファンクター

```
module MakeOrdSet (X : sig type t val cmp : t -> t -> int end)
  : sig type t ... end

module OrdInt = struct type t = int val cmp = ... end
module M1 = MakeOrdSet(OrdInt)
module M2 = MakeOrdSet(OrdInt)
```

【疑問】 M1 と M2 は同じモジュールと見なすべき？ (M1.t = M2.t ?)

- OCaml では M1.t = M2.t
 - モジュール上の式は全く同じなので、M1.t = M2.t と見なしても健全
 - 適用的 (applicative) ファンクターという

適用的ファンクターと生成的ファンクター

```
module MakeOrdSet (X : sig type t val cmp : t -> t -> int end)
  : sig type t ... end

module OrdInt = struct type t = int val cmp = ... end
module M1 = MakeOrdSet(OrdInt)
module M2 = MakeOrdSet(OrdInt)
```

【疑問】 M1 と M2 は同じモジュールと見なすべき？ (M1.t = M2.t ?)

- OCaml では M1.t = M2.t
 - モジュール上の式は全く同じなので、M1.t = M2.t と見なしても健全
 - 適用的 (applicative) ファンクターという
- SML では M1.t ≠ M2.t
 - M1 と M2 は同じ用途とは限らず、意味は違うかもしれない
 - 例) M1 は金額の集合, M2 は年齢の集合
 - 生成的 (generative) ファンクターという

OCaml のファンクターの振る舞い

```
module F (S : sig end) : sig type t end = struct type t end
module X = sig end
module Y = X

module A = F(X)
module B = F(X)
module C = F(Y)
module D = F(struct end)
module E = F(struct end)
```

OCaml ではファンクターの引数が**同じ名前**で**束縛**されている場合に限り**同じモジュール**と見なされる：

- $A.t = B.t$
- $A.t \neq C.t \neq D.t \neq E.t$

つまり、名前で束縛しなければ、生成的な幽霊型を作れる！
(ただし、トップレベル)

ローカルスコープを持つ生成的幽霊型の利用例

リストからベクトルへの変換：

```
module Vec : sig
  type 'n vec
  module Of_list (X : sig val value : float list end) :
    sig type t val value : t vec end
end = struct
  type 'n vec = float list
  module Of_list (X : sig val value : float list end) =
    struct type t let value = X.value end
end

open Vec

let foo () =
  let module X = Of_list(struct let value = [1.;2.;3.] end) in
  let module Y = Of_list(struct let value = [4.;5.] end) in
  Vec.add X.value Y.value (* 型エラー (X.t ≠ Y.t) *)
```

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ

サイズを第一級の値として扱うための単一型

自然数上の演算を表す型演算子

生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失

プログラムの記述の柔軟性の低下

トップレベルの生成的な幽霊型のファンクターによる実現

エスケープする生成的な幽霊型の実現

オフセットとインクリメント幅

エスケープする生成的な幽霊型の実現

```
module type S = sig
  type t          (* ? (生成的な幽霊型) *)
  val value : t vec (* val value : ? vec *)
end
module F (X : sig end) : S = struct ... end
```

生成的な幽霊型を持つベクトルは直接返せない (コンパイルエラー):

```
let f () =
  let module Y = F(struct end) in Y.value
```

生成的な幽霊型を含むモジュールごと返せば良い:

```
let g () =
  let module Y = F(struct end) in (Y : S)

let main () =
  let module Y' = (val g () : S) in
  ...
```

5 Appendix

型レベル自然数による静的サイズ検査のシグネチャ
サイズを第一級の値として扱うための単一型
自然数上の演算を表す型演算子
生成的な幽霊型のための型付けによる自然数の情報の喪失
プログラムの記述の柔軟性の低下
トップレベルの生成的幽霊型のファンクターによる実現
エスケープする生成的な幽霊型の実現
オフセットとインクリメント幅

オフセットとインクリメント幅

ベクトルの内積 (Lacaml) :

```
val dot : ?n:int ->  
        ?ofsx:int -> ?incx:int -> x:vec ->  
        ?ofsy:int -> ?incy:int -> vec -> float
```

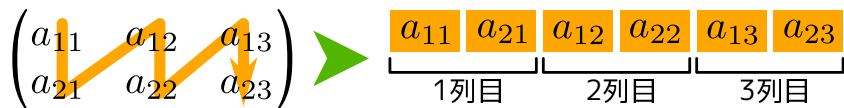
dot の計算式 :

$$\sum_{i=1}^n x[\text{ofsx} + (i-1)\text{incx}] \times y[\text{ofsy} + (i-1)\text{incy}]$$

$x[k]$ — ベクトル x の k 番目の要素 ($k \geq 1$)

オフセットとインクリメント幅の使い所

BLAS, LAPACK では行列を **column-major** 配置の 1 次元配列で表現



オフセット・インクリメント幅を指定すると、
列・行などをコピーせずにベクトルとして扱える。

例) $m \times n$ 行列に対して、

- i 番目の列 : $\text{ofsx} = mi$, $\text{incx} = 1$, $n = m$
 - i 番目の行 : $\text{ofsx} = i$, $\text{incx} = m$, $n = n$
- etc...

※ x には行列を格納した 1 次元配列を与える。

オフセットとインクリメント幅の検査

オーバーランが起きないためには

$$1 \leq \text{ofsx} \leq \text{dim}(x) \wedge 1 \leq \text{ofsx} + (n-1)\text{incx} \leq \text{dim}(x)$$

が成立する必要がある。

これは明らかに等しさの判定だけでは 検査できないので、
オフセット・インクリメント幅を用いない形式で実装：

```
val dot : x:'n vec -> 'n vec -> float
```